慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地域研究とオーラルヒストリー
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1: 地域研究とオーラルヒストリー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集１：地域研究とオーラル・ヒストリー

鈴木　正崇

本特集は 2009 年 7 月 11 日に行われたシンポジウム「地域研究とオーラル・ヒストリー」での発表をもとにして構成されている。オーラル・ヒストリーの定義に関しては、学会などの公の場で共通の理解が得られているわけではない。その内容は社会学の場合は、日常生活の聞書きやライフ・ヒストリーへの着目、被爆者・移民・被差別民などの社会的弱者との対話、阪神淡路大震災などの災害や地下鉄サリン事件といった出来事の聞書きなど多様である。一方、文化人類学や民俗学はフィールドワークを信条とし、20 世紀初頭以来、口頭伝承の研究を中軸に据え、民族誌を作成して研究を蓄積し、近年は多声性の提示やサバルタンの声を掘り起こすなど、社会や文化の全体性を描きだす試みを続けてきた。そして、日本民俗学の創始者とされる柳田國男による民間伝承への注目は、民衆の民俗知や心性の歴史を提示して、従来の歴史学を批判し、書かれざる歴史の重要性を明らかにした。しかし、それぞれの研究動向を把握し、相互の学問の領域や手法の連関性を究明して、オーラル・ヒストリーの範囲を定めることはかなり困難である。共通することは、当事者の「語り」の重視という認識と、聞書きという研究手法の実践であり、個人と集団を問わず、「オーラリティ」を通じて過去との対話を活性化して記憶を想起させ、文献史料による歴史とは別の広義の歴史のリアリティを究明する手がかりを与えるということであろう。オーラル・ヒストリーは、多様性に満ちた歴史を明らかにし、新たな研究方法の可能性を提示して、文献至上主義の歴史研究の刷新につながる可能性がある。近年の記憶に対する関心の高まりとも強く関連する手法であると言える。このような観点から見れば、オーラル・ヒストリーは、歴史学に止まらず、社会学や文化人類学の視野を深めて、硬直化した学問とは異なる知的な場を提供する可能性を持つと言える。

一方、地域研究 area studies とは、第二次世界大戦終了後に盛んになった学問の方法で、特定の地域を様々の専門分野の研究者による学際的なアプローチで解明する試みであった。英語の regional studies も地域研究と訳すことができるが、この場合は地域開発を前提とするような実践的ニュアンスが強く、統計資料を多用して理論構築を目指し、理系の発想が強く出る傾向がある。地域研究は、戦後のアメリカの世界戦略、特に対共産主義の防衛網を作る軍事的意図を持って構築されたという経緯はあるものの、学問の専門性の壁を崩す意味ではそれなりの成果はあった。しかし、1989 年の冷戦の崩壊以後、枠組みは変更を余儀なくされ、現実にも民族の対立と宗教の復興が顕著になり、国民国家や地域概念に揺らぎが生じ、グローバリゼーションやグローカリゼーションのうねりの中で、地域を越える大きな視角が要請されることになった。

本シンポジウムはオーラル･ヒストリーによって地域研究を見直すという意図を持っている。地域研究では、現地での聞書きや個人との会話が重視され、当事者の声が大きな位置を占め、その中には常に広義の歴史性が含み込まれているにもかかわらず、歴史性についてどのような観点から考察すべきかに関して、十分な議論が行われてこなかった。現在の世界では、地域の完結性はグローバリゼーションの荒波の中で脆弱化し、移民・移動が常態化して地域が融解して、歴史の認識も大きく変化しつつある。他方、他者理解のための根源的な手法としての「方法としての聞書き」は常に研究や分析の手法として残り続ける。そして、「オーラリティ」に基づいて明らかにされた多様な形の歴史が、文献や行動の中に再び浸透し、新たな表現として現われ、実践として甦ることもある。オーラル・ヒストリーとはいかなるものか。人間の社会や文化の研究に新たな視野を開くものとして有効性を持ち得るのかどうか､未だに定かではない。地域研究自体も果たして有効な研究枠組みであるのかどうか不確定である。しかし､「地域研究とオーラル・ヒストリー」という課題を設定することによって、相互に重なり合いつつ牽制しあう、社会学・歴史学・文化人類学との対話が可能になるのではないか。本シンポジウムの企画の意図はここにある。

論議する主題について基本的な観点を以下に列記しておきたい。

①オーラリティとはなにか。その中に現われる歴史の多義性の提示。

②「方法としての聞書き」の有効性と限界性。

③文献と伝承、書承と口承のはざまにあるものをどうとらえるか。

④自己にとって地域とは何か。あるいは地域を越えるものとは何か。

⑤双方向性の対話の可能性と他者理解・自己理解の変化の相関。

今回の報告者は、広義の歴史研究にたずさわりながらも､「オーラリティ」や地域にこだわりを持って研究してこられた方々にお願いした。

発表者は、社会学の立場からライフ・ヒストリーを組み込んで生活史・生活誌研究にたずさわり、現在は日本オーラル・ヒストリー学会の会長を務めておられる小林多寿子氏、歴史学と地域研究を組み合わせインドネシアの植民地下での民衆の動態を地域研究の立場から研究してこられた倉沢愛子氏、社会史の立場からラテンアメリカの一つの村を長期間にわたって調査して変化の動態を克明にとらえ、対話を通じて自己や社会への問いかけを行ってきた清水透氏、日本史から出発して南米のペルーの日系人という移民研究を再構築し、歴史と地域を越える試みを行ってきた柳田利夫氏の４名である。コメンテーターは、アフリカのカメルーンと日本の都市の研究を並行して行ってきた和崎春日氏と、ハイチとブラジルを中心として民衆のコミュニケーション回路を通じて口承と書承のはざまに焦点を当てて研究してきた荒井芳廣氏で、いずれも専門は文化人類学である。豊富な一次資料を持ち、特定の地域や人々に深い関わりをもって、長期にわたり調査・研究を進めてきた方々からの具体的な事例に基づいた報告と考察を期待した。

（すずき　まさたか　慶應義塾大学文学部）